

「煤煙ノート」(二)

山本昌一

朋子と知り合う前には要吉のまわりにどんな女性がいたのか。まず妻の隅江があげられる。隅江はいくつぐらいなのか、また要吉とはどういう経緯で結ばれるようになったのかはあきらかでない。「去年の冬、かねて妻と極った隅江を故郷から招び寄せた」(Ⅰ 6頁)と作の冒頭にあるが、その人となりや経歴などについては不分明である。「女の兎」を三ヶ月前に生み落した女性ということになっている。しかし要吉にとっては――

自分の燃えるやうな接吻に出会つて息もたえ／＼に倒れたことのある女(新聞初出部分)¹

でもあつたが、

髪も薄くなつた様ではあるし、一体に贅れたせゐか、以前は左程でもなかつた雀斑^{そばかす}が目立つて、顔が汚なく見える。(Ⅰ 89頁)

というごとく、平凡であまり魅力のある女性には見えない人物である。夫の言動に唯々として従うやうな女性という感じ、可もなく不可もない善良な女なのだ。

何時迄話してゐても、別に変つた話の種子があるでもなければ、又一向談話も冴えない。要吉は物足らなかつた(Ⅰ 91頁)とも書いている。いつてみればごくあたりまえの女ということになる。もう一人は、お種である。要吉が下宿をしていた家の娘で、一度結婚をしたが別れて、実家にもどつて来ている踊の師匠でもある女性である。

一昨年の冬、恰度今日のやうな日和の日であつた。要吉が学校から歸つて、何の気もなし庭から這入つて来ると、お種は髪を洗つたと見えて(略)被衣^{かき}のやうに身体を包む濡髪からは陽炎が立つと思はれた。足音を聞付けると、急に上半身を捻^ねつて振向いた。明るい所から這入つて来たためであらう、女の顔は只ぼつと卵形に見えるばかりであつた。要吉は我にもなくその手を執つた。女は男の弄ぶが儘に手を借してゐた。(Ⅱ 26頁)

要吉とお種の関係はアイマイで愛人とも情婦ともつかないが、出戻りで踊の師匠をしているという点では妻の隅江とはちよつと違った間柄

である。お種の母親はお種に再婚をすすめていて、それを要吉からもすすめさせようとし、要吉もそれに乗るという状態にある。別れたような別れたくないような関係にあるわけだ。もつとも要吉が入院したときお種は「最初から真心込めて介抱した」こともある。

朋子に出会うまでの要吉の女性関係はこの二人ということになる。要吉の母親と仲の良いお倉もいわくはありそうだが、それとわかる叙述はない。こうして三人目に登場するのが「目白の女子大学を出た」真鍋朋子なのである。

この当時の作家達の「女子大学」生に対する興味は改めていうまでもなくすさまじいものがある。文学の方から見ても小杉天外の『魔風恋風』（明治36年2月～9月）、小栗風葉『青春』（明治41年1月～11月）『読売新聞』の女主人公が目白の女子大出であったが、自然主義の一つの出発点である花袋『蒲団』（明治40年9月）のヒロイン芳子は目白ではないけれどもやはり女子大生ともいべき存在であった。この作あたりから女子大学生なるものが重要な登場人物として浮かび上ってくることになる。いわゆる「第二の恋」として主人公が新たな興味の対象として、自己の再生をかける存在として、文学的發展を求める対象として重要な役割を果たすことになるのである。もとより、ヒロインとしての対象を女子大学生だけにしぼることは中々むずかしく、時によっては単なる若い女学生あがり（たとえば風葉『恋ざめ』）という代役もあるわけだが、当時の作家はいずれも若々しく教養ある女性を交渉の相手として何かの突破口として求めているのであった。

神戸と小島要吉がはじめた「金葉会」なるものもどうやらそうした風潮とは無関係ではないらしく、要吉がふと神戸にこの会に対して「随分無意味な会だね」といった時、神戸は「この位意味がありゃ沢山じゃないか。今度この会を始めたのは、実際あの二人だよ。あの二人が言出したのだ。三枝子と朋子との会だと思へば、それだけで可いぢゃないか。僕は三枝子一人の会だと思ってるよ。」（Ⅱ 105頁）と語っている。つまり若い女性と交際する会だともいつているわけで、

「文学研究」に名を借りた女子学生を相手とする会なのだ。事実神戸は三枝子と親密なつきあいをしているのであり、いつてみれば女学生と交際するための特別の会ということになるわけだ。

そういう会であつてみれば要吉の朋子に対する態度もどちらかという中途半端なものになるのは当然である。

丸山の家の内と外とに残した二人の女が眼に泛んだ。二人を犠牲としながら、自分もそれに掬まれて身動きも出来ぬ。あの惨目な境遇から遁れようと思へば、新しい誘惑の力にたよる外はない。（Ⅱ 139頁）

「二人の女」とは隅江とお種のことだが、要吉は自分の行為は忘れて自ら「惨目な境遇」と考えているのが独特だが、朋子もその「境遇」から逃れるための「新しい誘惑」と見ているのだ。しかし別の見方をすればまさしく女たちの「惨目な境遇」を何とも解決出来ずに、それを放置したまま自らは「新しい誘惑」に身を投じようとする姿勢はあやういといわざるを得ないのだけれども、本気でその「境遇」から逃

げようとする意志があつたかどうかは大変疑わしい。

今の自分には誘惑に従ふ外に何の力もない。唯悪いことを重ねて行く。初めて一つの悪いことを忘れるために他の悪いことに移つて行く——その外に何うする力もない。(Ⅱ 139頁〜140頁)

「二人の女」のことは「一つの悪いこと」であり、朋子の方も「他の悪いこと」ではない。これは単なるいいまわしの問題ではなくて、要吉の三人の女に対する基本的態度なのである。つまり小島要吉である森田草平が、自らの対女性の認識においてそれぞれのケースを書くことによって改めて状況把握をすべき点において、それをひとしなみに「悪」として認識していない所に要吉の、そしてそれは草平の事柄把握の大ざっぱさが認められるのである。だから二人の女の処置に何も出来ないごとく、おそらく朋子についても何の処置なり対応なりが出来ないのも当然といえる。

「何うした、え、何うしたんです。」

「何うかして、もつと何うかして。」

要吉は犇と抱き緊めた。

「足りない。足りない。それぢや足りない。」

讒言のやうに口走つて、手当り任せに男の身体を掴んで引寄せる。その声は嗟れ、その手には狂人のやうな力が籠つた。要吉も稍たじろいだ。

「何うすりや可いか、何うすることも出来ないぢやないか」

「いやだ、く、何うかして、何うかして仕舞つて下さい。」

(略)

朋子は尚泣き止まぬ。身を戦はせて泣く。胸は大波を打つて、心臓の鼓動が手に取るやうに聞える。それが云ふに余る嬉しさに圧倒された涙とは思はれぬ。何だか絶望を洩らすやうでもある。要吉は氣抜けして茫然眺めていたが、思はず少し立退いた。俄に二人の間に鴻溝が穿たれたやうな心堀がした。肉体の接触が離れたばかりでなく、精神も永久に近寄り難いものではあるまいか。二人は全く別々な人間だ。それなら何うすることも出来ない。(Ⅱ 22頁〜25頁)

二人が心中を考える以前にすでに二人は「全く別々な人間だ」と要吉は意識しているのであつて、これでは心中もうまうまうなくなるといふ予感も出てくるほどである。

やや先ばしつて言うならば、やはり森田草平は事件から間をおかずの小説執筆ということもあつて、それぞれの女性の意義と位置を深く考える時間がなかったためということになるが、せっかくの「新しい誘惑」としての朋子と二人の他の女性とは違った存在として把握する必要があつたのに、それが出来なかったのである。

註

(1) 明治四二年一月一五日掲載。単行本では「放縦な空想を惹く対象になつた女」(Ⅰ 90頁)と変えられた。

(2) Ⅱ 51頁

*

上野公園のことがあつてから後の話の展開は朋子の要吉への手紙が中心となつてゐる感がある。「死への旅」という最後の目的に向かつて朋子の主導で話が進んで行くのであるが、要吉は矛盾にみちた朋子の言動にふりまわされ、朋子のペースにまきこまれたあわれな人間という面を強くしていく。草平の意図もそこにあつたので、不真面目ではない要吉の恋も、やや正常ならざる若い朋子の言動に心ならずも同情したところと草平のモチーフがあつた。最初の「二月二日」付の長い手紙も、若い女性が一生懸命につづつたモノローグとしてみると、いずれも抽象的なものではあるが、真剣な手紙となつてゐる。真を申せば、私の世界には恋も愛も同情も皆無意義の文字に過ぎない。残れるものは只理解といふことだけ、人と人との関係は理解といふことだけ、それで私は理解といふことを心配して申すのです。

(略)

かう外界と絶縁した身ながらに、晩夏以来先生に対して何等かの接触を感じて、何度となく怪しき思ひに襲はれたのは疑ひなき事実です。(略) 先生のごことは妙に些細のことまで気が着く。

けれど駄目です。何うしたつて私は駄目です。胸が一杯になつてゐても、はつと全我を掲げて投じることが出来ないのです。

私は中庸といふことは出来ないのですから、火かさらずば氷、而して火は駄目だと確めたのです。氷です、雪です、雪国へ突進します。

先生は未だ火に付きたまふか、かくて焚死する力がありますか、左様ならばそれ迄です。併し氷に付きたまはば、あつ氷獄の中に白骨を負うて何々大笑するを面白しとは思さぬか。(Ⅲ 47頁〜55頁) 大変長い手紙の主要な部分だけを抜き出したが、これらの手紙は要吉が「どうも文章が生硬で不可ない、同じ事でも何故もつと女らしく書けないんだらう」という感慨のごときものではないのであつた。朋子是要吉に対し全き「理解」を求めているのであり、凡常の男とちがつて要吉こそが朋子の言おうとすることを理解してくれる存在として朋子も交際したはずなのである。ここに要吉が朋子に求めていたものと朋子が要吉に感じていたことのギャップがある。要吉は「女らしく」といつている。言葉じりだけをとらえて言えば劇しい生きざまを求めている人間に「女らしさ」を求めても見当ちがいという他はない。「新しき誘惑」としての朋子の思考と要吉の要求とはすでにここで違つてゐるのである。次の朋子の長い手紙もやゝ分かりにくい内容をもつものであるが、基本的には朋子の姿勢に変わりはなく考えられる。この手紙は要吉の「われは執拗に君を愛す。日夜に君を想ひ、君と慕ふ。(略) われ独り居て君を想ふ時、毎に君が早く死すべきを思はざる能はじ」という分かりやすいけれど単純で甘ったるい手紙に対しての反応である。また若いゆゑに文意不明のところもあるせつかな文面であるが、若い女性の手紙として生き／＼している。

私の冷酷なるは事実候。時には軽薄なる言葉さへ、仕打さへ、ひよいくと出ることもよく承知の上にて候。されど先生だけは、よも

それを咎めたまはじ。(略)

こんな矛盾だらけの私、生涯自らより外なる人に解されること夢にも想ひかけざりしに、今宵の如く幸福に感じ候こと、生れて始めてに候。多分始めの終りなるべく、過去二十年の無意味なりし半生涯も、今にして思へば生甲斐ありしよと涙も浮び出て申候。(略)

私に取りては死が唯一の厳肅なることに残り居候。されば却々容きことにては死するを惜しと思ひ申候。(Ⅲ 158頁〜162頁)

朋子は要吉の考えに対し全て真剣に対応している。本心を打ち明けて相手の反応をうかがっているのである。たしかに「生硬」ではあるが要吉が「死」をほのめかすのに対し、朋子の方は真剣に考えるテーマとして受けとめ、その実行へと一歩ふみ出す姿勢があるのである。要吉がきっかけとなったか、もともと朋子にあった志向なのかは分かりにくいけれども、朋子の姿勢はやはり真剣そのものである。要吉は引くに引けないかたちで朋子の熱意に引きずり込まれるが、一方すでに「二人は全く別な人間だ。それならどうすることもできない」と要吉が意識した以上、それをひっくり返す事態がおきない限りその意識は解消しない。またそうした事態はおきないはずである。

今は隠すも詮なければ云ふべし。あの折霧の中を歩きながら私は——場所も貴方の所好だといふ鎌倉鶴ヶ岡の社前にて——貴方を手にかけて殺した幻影を泛べてゐた。その時何ういふものか、私は、生き、残つた、生き、残つてゐる必要があるやうに思つた。——私は詩人である、芸術の徒である、美の崇拜者である。(略)

併し何を言つても、今となつてはすべてを過去の渦巻の中に葬る外はない。(Ⅳ 53頁〜55頁)

こうした要吉の述懐はこの後も続くのだ。もちろん一方では朋子との死を考えている要吉であり、こういう部分もあるにはある。

自分は心からあの女を偶像の様に崇拜して来た。あらゆる熱情を捧げて来た。この儘では——何うもこの儘では諦めきれない。

あれも迷へる女だ。縦し癪癪でないにしても——癪癪は余りだから撤回しても可い——あの女の頭脳に異状があることは争はわれない。あの怖しい程過敏な神経を持ちながら、自家の行為の責任を知らないやうに見えるもの、或はそれがためではあるまいか。今の也に新しい女は幾許でもある。あの女は普通の新しい女ではない。あの女の言動を裏付けるものが何かなければならぬ。何か暗い影が——黒い日の下に生れて、黒い運命に支配されなければ、こんな女は出来ない。(Ⅳ 48頁〜49頁)

要吉は朋子を理解しようと一生懸命である。「崇拜」と「熱情」を捧げてきており、妻の隅江と赤ん坊を犠牲にしても、朋子との関係を続けているのである。にもかかわらず、隅江に対するすまないという気持ちもすてきれずにいる。

が、こんなに迄心置きなく隅江を虐待することが出来るのは、心の底でこの女を一番深く愛してゐる証拠ではあるまいか。尤も、それを又口実にして虐待を重ねようとするのだから、自分ながら浅猿しい。(Ⅳ 62頁〜63頁)

中年男の浮気の気持としては当然ありうる気持であり、凡常の意識であるといつて良いが、こういう未練の気持がある以上朋子との関係を中心の状態まで持続し、持つてはいけないということである。死への条件がととのつていないのだ。たとえば隅江は要吉とお種との関係について何の咎め立てもしない。要吉は隅江に言う。

「随分お前にも苦労させたが、もう愛想が盡きたらうね。」

「何処なも？ そんな——」(IV 64頁)

要吉は何に對してあやまつたかは不分明ではあるが、従順な隅江は要吉を難詰したりはしないのである。要吉には朋子と行動をおこし、それを遂行するための障害はもう何もない。それにもかかわらず、要吉は常に朋子を分析し、彼なりの結論を下している。冷やかである。

あの女に取つて自分は何だらう。要吉は始めてこの問題を自分の前に出して見た。が、答ふるに堪へない。あの女のために自分は弄ばれ、苛なまれ、又侮られもした。併し愛されたとは——女が自分の上に興味を持つたとは云へようが——愛されたとは、幾許晶目にも思へない。それなのに、自分は却つて女の冷酷な態度を喜んだ。女が自分に対して冷酷であればある程、却て心が惹かされた。今日迄自分が女に依つて与へられたものは、不安と猜疑との長い連続に過ぎない。この免れ難い猜疑の去つた時は、即ち女に對する興味の去つた時で、この恋を続けようと思へば、何時迄も猜疑の犠牲となる外はあるまい。畢竟自分は犠牲に過ぎない。(IV 101頁〜102頁) こうした態度からいよいよ二人は塩原へ向かうことになるが、これで

は心中はできない。もとより心中には無理心中もあれば、納得づくの心中もあり、形態はさまざまであるはずだが、作の必然としての流れはないのである。既に引用したようにこの「媒煙」の主人公のモデルは森田草平であり、平塚明子であり、その結末は既に知られているために、それを變更することは不可能であるが、作の展開は自由に書けるはずにもかかわらずそれを出来なくさせている主人公の感慨がある。

「実はね」と、要吉は女の背に手を掛けたまゝ、「夜が明けたらお宅へ電報を打つて、迎への人に来て貰はうと思つてゐた。その人達に貴方を渡して置いて、私は——矢張北を向いて山越へに行ける所まで行かうと決心した」(IV 221頁〜222頁)

朋子を家の者にゆだねて、自分は「山越へ」をしようとしている。ただこの「山越へ」が死のためのものか一人で生きたためのものかはわからないのである。「山越へ」をしたところで、のんびりと一人で温泉にでもつかるかもしれないのだ。

註

(1) III 59頁

(2) III 144頁

*

夏目漱石は『煤煙』第一巻（明治四三年二月十五日）の序文で『煤煙』について次のように言っている。

「煤煙」の後編はどうもケレンが多くつて不可なり。非常に痛切なことを道楽半分人に見せる為を書いてゐる様な気がする。所が前半には其弊が大分少い。一種の空氣がずっと貫いて陰鬱な色が万遍なく自然に出てゐる。（I 三頁）

同じようなことは『煤煙』連載中の草平あて書簡にも言われている（明治四二年二月七日）。漱石のここのいう前編とは作品全体からすれば四分の一程の分量なのであるが、あとの要吉と朋子との関係部分をほとんど否定しているわけだ。もとより漱石の指摘もわからないでもない。たとえば要吉と神戸の次のような会話などひとりよがりのキザな対話である。

「寒いね」と要吉が口を開いた。「真個まご錢がないやうに寒い。」

「魂でも売るさ」

「さう」と、何やら考へてゐる。

神戸はつく／＼相手の顔を見守りながら、

「買手がありや、本当に売る気だから君は怖ろしいよ。」

「ふ、ん」と要吉も鼻の先で笑ひながら、

「併し凄いい晩だね。魂の買手が来さうな夜だ。」（IV 14頁）

こうした部分がある後半部であるが、「煤煙」の重要部分で、注目す

べきものがあるのはこの後半にある。漱石評は草平の意図を取りちがえているのであって、やや道義的な面から「煤煙」を裁断しているのである。作の大部分を占める以上当然のことであるが、この作のテーマは、要吉と朋子との交渉部分にあり、「煤煙」は朋子と要吉の不可解な関係、交渉ともいふべき処が大切なのである。漱石の批判はいつてみれば要吉の側からの批評なのだ。しかしこの作品は朋子のわかりにくい態度表現が眼目であり、ここに「煤煙」の書かれるべきモチーフがあつたのだ。朋子に対する理解がやはり漱石といへども及ばなかつたといつて良い。もちろん要吉と朋子との関係が充分熱したかたちで書ききれてはいないことはある。

前稿で私は「煤煙」はダヌンチオの「死の勝利」よりツルゲネーフの「煙」の方を注目すべきだといったが、それは草平の力点はツルゲネーフの「煙」に通ずる女性の持つ不可解な面の表白にあつたのであり、「死の勝利」に見られるような死への希求という世紀末的ムードを書くものではなかつたのである。したがって朋子は「死の勝利」のイツポリタという女主人公ではなく、「煙」におけるイリーナに通じるものなのだ。これは言うまでもなくドーデの「サツフォ」の女主人公にも通じるもので、草平がこの作の中でギリシャの「サツフォ」に触れているのも（第十四回）、ドーデ「サツフォ」のあの恋愛のための恋愛ということ暗示しているのである。「死の勝利」が作中強調されているために、そちらに解釈の力点がおかれるが、作品の展開を考えれば要吉、朋子は別に死んではいないのであり殺されてもいず、前に

見たごとく要吉は生きる要素が強いのである。草平が題名を「死の勝利」ならぬ「煤煙」とした理由もそこにある。「死の勝利」とするには草平は気恥かしい点があるのであり、「煤煙」とすることの方に草平の思いもあつたことになるわけだ。

尾花峠に行くとき携帯した日記に朋子は次のように書いた。

我生涯の体系を貫徹す。われは我が^{システム}に因つて斃れしなり。他人の犯す所に非ず。

三月二十一日夜

朋子の態度は首尾一貫しているといえる。おそらく朋子は死を当然としていたのであつて、殺されることによって自分の生涯を筋の通ったものとするのをのぞんでいたのである。要吉との交際において要吉などから見れば意味のわからぬことを口ばしついていたけれども、これは朋子の身構えであつて、「女らしく」などという自分勝手な考えから攻撃してくる要吉に対し、理論武装をしていたことになる。しかも自らを家ではいい子に見られているといいながら、世間体など意に介さない女性であつて、行動にはみだれがないのである。こういう「新しい女」(Ⅳ 49頁)を書いた草平を認めるべきであろう。漱石のように道義的な面から要吉を見、朋子を見ている見方は朋子と要吉の交際を見誤っているというべきである。それは作者草平にもすっかりとした認識がなかったともいえるのである。幸い草平の手に書簡が残った。もとより「煤煙」に使用されたものが全て実際に交わされたものであるかどうか、小説の展開にあわせて、取捨選択が、書きかえがされて

いるところもあると思われるが、全体としてはやはりらい、うのものが中心となつてることが考えられる。そうしてこれが一つの新しい主張をする女性の姿を示しているのである。

手紙の中味が抽象的でアイマイな点はたしかにある。これは当時の最も進んだ所にいた女性の姿なのであつて、それはすべての面に身構えながら自分の思想を実践してゆくためのアイマイさと考えられるわけだ。

(本学教授・国語国文学)